

シンポジウム2

高脂血症・脂質異常症における動脈硬化性疾患リスクとしての脂質管理

澤山 泰典

九州大学病院臨床教育研修センター准教授



高脂血症・脂質異常症は、糖尿病、高血圧、喫煙と並んで、動脈硬化の重要な危険因子の一つであり、近年増加傾向にある動脈硬化性疾患を予防、管理するうえで、高脂血症の適切な診断およびその治療が重要である。さらに、高脂血症・脂質異常症はそれ自体症状のない疾患であるので、高脂血症・脂質異常症と診断されたら、動脈硬化に関する検査を行い、患者の管理目標値を定め、動脈硬化予防のための脂質是正を含めた包括的な治療方針を決定する。高脂血症・脂質異常症治療薬には、スタチン、レジン、プロブコールやフィブラート等があるが、高脂血症・脂質異常症発症には遺伝的要因に加え、肥満症、耐糖能異常などさまざまな生活環境や生活習慣にかかわっており、包括的医療の見地から症例を捉えることが必要とされる。最近、メタボリックシンドローム、すなわち内蔵脂肪の蓄積とそれによる脂質異常・高血圧・耐糖能異常が出現することで動脈硬化病変に様々な影響を与えることが徐々に明らかにされてきた。したがって、個々の危険因子の処理による治療法も重要であるが、メタボリックシンドロームのように内蔵脂肪の減少により大きく病態の改善が見込まれる病態の存在の重要性が新たに加わった。

今回、疫学的調査（福岡県福岡市、粕屋町、長崎県壱岐市および沖縄県八重山地区の一般住民や透析患者を対象）や実際の外来患者調査をもとに、動脈硬化のリスクファクターの検討および血清脂質管理について述べる。